

近世社会の文字環境

大石 学

はじめに―江戸への注目―

近代日本の発展モデルであった欧米型文明が、今日、資源エネルギー、環境・温暖化、災害激甚化、格差・貧困、人権・差別、パンデミック、戦争など世界規模・地球規模の深刻な危機を迎えている。そのような中で、近世日本Ⅱ江戸時代への関心・注目が高まりつつある。これは、たんなる郷愁を越え、江戸社会が「平和」「安心・安全」という普遍的価値をもつ社会であり、今日「和風」「日本風」とよばれる日本固有の「江戸文明」を作りあげたことを認識し、従来の「明治維新Ⅱ近代化・文明化」以前の、「江戸時代Ⅱ差別・抑圧」の未開時代という評価・イメージに修正を迫る動きでもある。

とくに注目すべきは、一〇〇年以上続く戦国時代を克服し、豊臣政権による朝鮮侵略という国内外の戦後処理をへて実現した二五〇年以上の長期の「徳川の平和」(Pax Tokugawana)^{バクス・トクガワナ}である。世界史でも稀有なこの長期の「平和」は、たとえば、幕末期に来日したフランス公使レオン・ロッシユが、十四代將軍家茂宛の上書において、「二百五十年の間、国内泰平にして目に干戈(武器)^{かんか}を見ざるの洪福(幸福)を保てるは、世界に聞たる例なき所なり」(1)と述べたように、同時代の来日外国人に高く評価された。

近世後期の蘭学者渡辺崋山は、天保九(一八三八)年、江戸参府のオラ

ンダ商館長ニーマンとの対談において、「一、或問、二百年来、干戈を動かさざる事、他国にも有之候や、答云、かかる安靖の国は、更に無之候、西洋は一日も寝食安からず」と、二百年以上武器を使わない国は他になく、西洋は一日として安心できる日はない、と述べている。ただし、ニーマンは「さるからに諸国実政を尊び、国家に憂勤する事、又他に異に候、近來学芸益盛に相成候にしたがひ、大志雄才のもの発出致候」と、西洋諸国は現実政治に長け、学問が発達し、大志を持つ者が出現した結果、「また一地球中、五分の四〔按ずるに、欧羅巴・阿弗利加・亜米利加・亜烏斯太刺利を指〕は、欧羅巴の政教を受ける如くなりしも、皆憂勤憤興より出て、一失一得ともいふべき也」と、地球上の五分の四が西洋の支配を受けるようになり、一長一短であるという。そして、「この亜細亜諸国は国富み、風俗寛裕なる故、治め易き方もあるべし」と、当時アジア諸国は国が豊かで、風俗もおだやかであることから支配は容易とも述べ、日本を含むアジア諸国が支配の外にある「平和」な社会であったとしている(2)。

私は、この長期の「徳川の平和」を基礎から支えた要因として「江戸の教育・教養(リテラシー)」があると考え(3)、さらにそれが、「笑い」を伴っていることに注目した(4)。

本稿では、これをふまえて、川柳・落書などを例に、あらためて江戸の

「平和」「文明」「教育」、そして「笑い」を基礎づける、江戸社会の文字環境について述べるものである。

I 「徳川の平和」(パクス・トクガワナ Pax Tokugawana) の自覚・認識

まず、江戸時代人の「平和」の自覚・認識について、川柳・落書などにより見ていきたい。江戸初期に織田信長旧臣の太田牛一が記した『信長公記』には、「国主に生るゝ人は、他国を奪取せんと欲するに依りて、人数を殺す事、常の習ひなり、(武田)信虎、信玄々々より勝頼まで三代、人を殺す事数千人と云ひ、員を^{かず}しらず」⁽⁵⁾と、武田氏三代などの戦国大名らが、他国を奪うために数千人を殺したという過酷な時代を記している。

また、戦国大名小田原北条氏の海賊役を勤めた三浦浄心は、寛永末年成立の「慶長見聞集」において、「童子あまねく手習ふ事」と、子供たちが皆手習いをするようになったことと題して、「聞しは昔、鎌倉の公方持氏公御他界(一四三九年、永享の乱)より東国乱、廿四五年以前迄、諸国におゐて弓矢をとり治世ならず、是によつて其時代の人達は、手ならふ事やすからず、故に物書人はまれにありて、かゝぬ人多かりしに、今は国治り天下太平なれば、高きもいやしきも皆物を書たまへり、尤も筆道は是諸学のもといへるなれば、誰か此道を学ばざらんや」⁽⁶⁾と、かつて室町幕府の第四代鎌倉公方の足利持氏が永享一一(一四三九)年に上杉憲実^{あしかがもうちじ}に攻められて自害(永享の乱)して以来、東国社会は乱れ、二十四、二十五年以前(大坂の陣)までは、諸国で皆武器を持ち戦乱が続いた。このため、当時の人々

は手習いができず、字を書く人はまれで、書けない人が多かったが、今は国が治まり、天下太平となったので、身分の上下なく皆字を書くようになった。字を書くことは、すべての学問の基礎であるので、皆これを学んでいると述べている。三浦浄心は、「平和」の到来が、文字を学ぶ人々の増加、すなわちリテラシーの社会的向上につながったと指摘しているのである。

さらに、八代將軍吉宗に仕えた成島道筑(源鳳卿)は、「東方農準竝農譚拾穂」において、「一日本の風俗、戦国の余にうけて、人々武を貴び生死を軽ず、是経国の大瑾也^{きん}、武士の外には用なき事なり、漢土には文武官を殊にす、官人といへども左文右武の道を分てり、乱に戡^{かっ}(勝つ・殺す)は武、成を守るは文なり、民のごときは一生の慎謹、生をおしみ、子孫を思ふを第一とすべし、孝悌、忠信、礼楽の教、みな生を養ふの教なり、民生をおもんぜざれば、鬭争を好む」⁽⁷⁾と、享保期の風俗は戦国時代の影響が残り、人々は武を尊重し生死を軽んじている。これは治世の欠陥である。しかし、この風潮は武士以外の身分の者には不要である。中国では文官と武官を区別し、戦乱の時代に勝つのは武官であり、平和な時代を守るのは文官である。民衆はこれと関係なく、一生慎み命を惜しみ、子孫のためを考えることを第一とすべきである。儒教の孝悌、忠信、礼楽は皆生きるための教えである。民衆が命を惜しまないならば、結局戦争を好むことになる。民衆は、ひたすら命を大切にすべきと述べている。

Ⅱ 江戸武士・庶民の「平和」とリテラシー

江戸時代の「平和」は、元和元（二六一六）年大坂夏の陣で豊臣家が滅亡することにより、後世「元和偃武」^{えんぶ}（元和年間に武器を伏せること）として庶民に認識された。以下、川柳や落書によりこの点を確認したい。なお、煩雑さを防ぐために、以下の引用文献はaとdとし、頁数を付す。

《出典》

- a 『日本古典文学大系五七・川柳狂歌集』（岩波書店、一九五八）
- b 『近世文芸叢書・川柳九』（国書刊行会、一九二一）
- c 矢島隆教編『江戸時代落書類聚』（東京堂出版、一九八四）
- d 粕谷宏紀編『新編・川柳大辞典』（東京堂出版、一九九五）

一 「平和」の自覚

① 徳川家康と「平和」

a 「御武徳は 具足をぬがせ 服をきせ」（b四一八）は、徳川家康が達成した「平和」のおかげで、甲冑（鎧と兜）を脱がせて平服を着せたと、泰平の日常を評価している。

b 「名将も 勇士もしれぬ ありがたさ」（b三五〇）は、「平和」時に武勇の英雄が生まれないことを感謝している。

c 「あせ水を ながして習ふ 剣術の やくにもたゝぬ 御代ぞめでたき」（a二六七）は、剣術の稽古が無駄になった「平和」を喜んでいる。

d 「高枕 栄華の夢の 覚ぬ御代」（d四五〇）も、「平和」な時代に、枕

を高くして安心して眠れるありがたさを詠っている。

② 元和偃武

この「平和」への画期として、元和元（二六一六）年の大坂夏の陣は、のちに「元和偃武」として、広く意識されるようになった。

a 「米艦渡来 名にしおふ 大坂陣の まゝなれば 錆たるつるぎ とぐよしもがな」（c中二六九）の歌は、幕末期にアメリカ艦隊が到来したさい、有名な名刀も大坂の陣以来、使用してなかったため錆びついていた、これを早く研ぐ方法があればいいのだが、と詠っている。

b 「元和から 武器は納まる 蔵の内」（b三二七）も、元和偃武以降、武器が蔵に納まっている様子を詠み「平和」を自覚している。

c 「元和後は 鎗も玄関の かざりもの」（d二六三）も、元和以後は鎗を使うこともなく、玄関の装飾品になったことを詠んでいる。

③ 甲冑・武器

「平和」は、戦国時代の必需品である武器甲冑を不要のものにしたとも認識している。

a 「御具足は 春と夏とに 見るばかり」（b二六二）は、甲冑が、春と夏の虫干しで見るだけであり、日常は見ないと詠んでいる。

b 「泰平の 武者は五月に 出るばかり」（b二八五）は、「平和」時の武者は、五月の武者人形だけとしている。

c 「人形屋 太平櫃へ 武者を入レ」（b三八三）は、「平和」時に人形屋が武者人形を櫃（ふた付の箱）にしまうことを詠っている。

d 「太平の 矢狭間は風も ぬけぬなり」(b二八〇)は、「平和」な時代の城郭の塀や櫓などの矢を射るためにあけた穴は、覆われてしまい風も抜けないという。

e 「竹光は 御代に目出度 道具なり」(b三七九)は、刃のない竹光を「平和」の道具として評価している。

f 「鎧持と 金持遣ふ 物でなし」(b三八〇)は、武器の鎧は使われず、金持ちもまた無駄遣いしないと、「平和」を詠んでいる。

g 「泰平の 鎧は虫が うらをかき」(b三九四)は、「平和」時の鎧の裏を虫が喰ったと詠っている。

h 「泰平の 蜘蛛り丸は 御煤竹」(d二四四)は、源頼光(九四八〜一〇二二)が土蜘蛛の精を斬ったという源氏累代の宝刀の蜘蛛り丸が、「平和」の時代煤払い、蜘蛛の巣払いの竹に代わったことを詠んでいる。

i 「軍配も 袴で持つ 御代ゆたか」(d二五〇)は、合戦で鎧兜の大將が指揮するさいに使う軍配を、「平和」時には相撲の行司が使っていると詠ったものである。

j 「泰平の 弓矢駒場の 鳥おどし」(d二九二)は、「平和」時の弓矢は、馬の訓練や鷹狩のさいに鳥を脅す道具として使われるようになったとしている。

k 「菖蒲太刀 人をあやめぬ 代にかざり」(d三七二)も、人をあやめぬ(殺さない)時代となり、五月の端午の節句には、金銀彩色した木太刀(菖蒲太刀)を飾るようになったという。菖蒲で作った太刀と「殺める」

をかけている。

l 「劔一が しちやを出ると 無刀也」(b三九五)は、すでに一度質屋に行つて刀一本になったか、あるいは元々一本差しの浪人か、いずれにしても質屋で刀を質物に借金をする武士の困窮ぶりを描いている。

二 文字リテラシーの個人的・家庭的環境

江戸の人々は、「平和」の自覚と感謝とともに、日常的に文字に親しみリテラシーを高め、文字文化を発展させていった。

① 日記

庶民は多く日常的に日記を付け、旅に出るときにも旅日記を書いていた。

a 「物差で 雪をつつ突く 日記つけ」(a七九)は、雪の深さをはかり日記に記録する庶民を詠んでいる。

b 「川止に 手にはを直す 旅日記」(a一四六)は、川止めで暇ないときに、「てには」すなわち助詞を推敲していた。

c 「まつしまで かみをとぢたす 旅日記」(b四二八)は、芭蕉をはじめ多くの歌人が感動して歌を詠んだ松島で、旅日記に新たな紙を足すという文人氣取りを詠んでいる。

d 「久能山 筆も傘取る 旅日記」(d二四二)は、駿府久能山(静岡市)を傘型にスケッチするパターンがあったことを示す。

e 「旅日記 八日目に付く 燕子花」(d一四四)は、江戸を出て八日目に燕子花の名所の三河国八橋(愛知県知立市)に到着することから、多く

の旅行者が日記に燕子花を描いた。

②小遣い帳・大福帳

庶民は小遣い帳を作り、商家は大福帳を作成していた。

a 「舟賃は 小遣い帳の 初手に付」(a二〇〇)は、庶民が正月初めに小遣い帳の最初の頁に、七福神を乗せる宝舟の絵を買ったことから、その代金(舟賃)を記入した。

b 「気が減ると 小遣帳を やめにする」(d一九四)は、赤字で気が減入ると小遣い帳の記入を止めることをいう。

c 「吉日に 大福帳は 書ぬなり」(d四四二)は、商家で日々の売買を記録する大福帳(勘定帳)は目出度い名称であるが、同じく目出度い吉日は店を休んだことから書くことはなかった。

③読書・貸本屋

本の購入のほか、貸本屋など本は町や家に多く見られ、人々は本を愛し、読書を楽しんだ。

a 「うたゝ寝の 顔^{かほ}貞へ壹冊 屋根に葺き」(a一一四)は、寝転んで両手で顔の上に本をかざして読んでいたが、思わず眠ってしまい、本が屋根のように顔を覆ってしまった姿である。庶民が余暇に読書をしていたことが見えてくる。

b 「不審紙 だらけな四書の 払物」(b四四五)は、少し背伸びして儒学を学んでいたのだろう、挫折して本を売る様子を詠んでいる。四書は、儒教のうち『論語』『大学』『中庸』『孟子』の四書、「不審紙」は疑問や

不明な部分に挟んだり貼ったりする付箋、払物は使用しなくなって売り払う物である。頑張って学んだものの、ついに断念、付箋だらけの本を売り出す風景が描かれている。

c 「四書の中 から炙箸が 片し出る」(d三三五)は、『大学』『中庸』『論語』『孟子』四書から栞の代わりにしていたお灸の箸が出てきたことを詠う。

d 「樟脳を めんどしさうに 四書へ入れ」(d三三五)は、本の虫食い予防に樟脳を面倒くさそうに入れる様子を描いているが、本の価値・大切さは認識している。

e 「ゑがござる かとしき(史記)を見る はつかしさ」(d三三〇)は、中国正史『史記』を通俗軍記と間違えて、挿絵があるか尋ねて恥ずかしい思いをしたことが詠われている。

f 「三国志 手紙はよまず 仕舞^{しまい}也」(d三三〇)は、中国古典の長編『三国志』は面白いところだけ読んで読了とする。

g 「うす本へ とつさまの手で かなを付け」(d九〇)は、旦那の習い事の浄瑠璃や清元の薄いテキストに、自ら読み仮名を付けている様子が詠まれている。

h 「絵の所が 出てよみ本を 子にとられ」(d八一三)は、親子で一緒に本を読む姿が見えてくる。

i 「国姓爺^{こくせんや} などを島田の 亭主かし」(d三四九)は、東海道島田宿で川止めの退屈をしのぐため、宿の主人が浄瑠璃本を貸してくれた。

j 経典の書写も日常行われていた。「夏書^げき（仏典書写）する 手へ留る 蚊を 吹て捨て」（d二五二）は、夏の間、僧や市民が仏典を書写することであるが、夏の蚊が邪魔しても叩かずに吹いて遠くに飛ばし、仏行だけに殺生をしないことを述べている。

k 「絵草紙を 嫁と娘か またせとく」（d四二六）は、絵草紙や一枚絵などを売歩く商人を待たせておいて吟味する母子を詠う。

l 「かし本や 唐と日本を 脊負てくる」（b二八五）は、中国の漢文・儒学の本と日本の草紙本などをいっしょに持って町々を廻る様子を詠んでいる。

m 「筆まめな 得意に困る かし本屋」（d一五四）は、書き込みや落書き、さらには写本などが活発に行われ、貸し本屋を悩ませていたことがわかる。

④書状

人々は、コミュニケーションの手段として日常的に書状をやり取りした。

a 「国の母 生れた文を 抱あるき」（a三五）は、江戸に出た娘が結婚し子を生んだのであろう、故郷の母が出産の書状をうれしくて抱いて歩く様子が描かれている。

b 「仕切り場へ 尹右衛門手紙 持て来る」（d四五八）は、歌舞伎劇場入り口の仕切場（事務室）から手紙を運んできた者が、幕間までただ見をする様子を詠う。

c 「わが好かぬ 男の文は 母に見せ」（d七〇五）は、好きな男性からの

恋文とは異なり、好きでない男性からの書状は母に見せる娘を詠む。

d 「十の字の しりをまげると 嫁おぼえ」（b七七）は、十の縦棒の最後を曲げるのがおしゃれな書き方と覚えた嫁の字を詠んでいる。

e 「手紙には 狸臺には 鯉をのせ」（a一二二）は、贈り物の「鯉」の偏の部分を誤って添状で「狸」と誤字を記してしまったミスを笑ったものである。

f 「寝て読んだ 文まんなかで 起き上り」（a一九七）は、「拝啓」に始まる定式の挨拶部分が終わる書状の途中で衝撃的事件が記されていることから、慌てて起き上がる姿が詠まれている。

g 「晝置の ことなむさんと 十三里」（d三五八）は、離縁を望み、家に書置きをして鎌倉の東慶寺に逃げ込むことが無事成功することを祈っている。

h 「下女が文 新撰字鑑 にも見へず」（d三八八）と、下女の書状の誤字は、平安前期の漢和辞書である『新撰字鑑』にもない奇妙な文字と詠んでいる。下女もそれなりに文字を書き、書状を出していたのである。

i 「鐵釘^{かな}と めゝずと下女は 取り交わし」（a一五七）は、下女とおそらくは下男との恋文であらう、金釘文字とみみずが這ったような下手な手なくずし字のやりとりを詠んでいる。

j 「色文を おとしてめしも くわぬ下女」（d八一）は、せっかく書いた恋文を落としてしまい、心配で食事も喉が通らない下女（奉公人）の様子を詠っている。

k 「去り状に 無筆は鎌と 腕を書き」(d三一六)は、離縁状に「かまわん」を書いたという。

⑤証文

文字社会・文書社会は、さまざまな社会経済関係から多様な証文が作成された。

a 「書出しで ぶちのめされた やうになり」(a二二四)は、請求書や勘定書など、表題で衝撃を受けた様子を詠う。

b 「久離帳 下書は親仁の ふるへ書」(d二二三)の「久離(旧離)」は、失踪・欠落した親族との血縁関係を断絶する証文。悲しみか怒りか下書きを書く親の手が震えている。

c 「師匠様 親類書の 伯父になり」(d三八八)は、婚姻・就職などのさい手習い(寺子屋)の師匠に親類書を書いてもらうが、そのついでに伯父として保証人になってもらうことを詠っている。

d 「山までは 紙は重荷の 関手形」(d四一三)は、名主・五人組などが発行した関所通行手形は、箱根山の関所までは、重要で亡くしてはいけないことをいう。

e 「老歩さへ 出せば生国 より存じ」(d三六八)は、奉公人請状の定式文言であり、手数料一分を出すとして作成してくれた。

f 「しち屋から 切れ文の来る つらいこと」(d二二三)は、質入れして借金したものの期限内に返金できず、質流れするという通知が届き、辛い思いをすることが詠まれている。

⑥生活

その他、文字の普及とともに、庶民生活にさまざまな影響が見られた。

a 「風呂敷の 古筆で母を 思い出し」(b九七)は、母の風呂敷を開けると、愛用の筆が出てきて、母を懐かしんでいる。母もまた日頃文字を書いていたのである。

b 「物差の うらに御針の 釘の折れ」(d二二八)は、縫物に使う物差しおはりの裏側に、所有者の針子の女性の名前などが、読みにくいかな釘文字で書かれていた。

c 「頼まれて つけかけをする 玄関帳」(d二五九)は、訪問先の玄関に備えてある来客記帳用の帳面に、頼まれた他人の分も名前を書く様子である。

d 「おやといふ 二字と無筆の 親はいひ」(a一四二)は、子供を叱るシーンで親が、漢字の「親」一字でなく、仮名の「おや」の二字の言うことを聞くように説教している。リテラシーの格差が詠まれている。

e 「梶原と 火鉢の灰に 書いて見せ」(d一五五)は、歌舞伎の話題の途中、悪役の梶原景時らの名前を火鉢の灰に書いており、火鉢ののちの黒板・ホワイトボードの役割を果たしていたことがわかる。

f 「色の名を 娘火鉢へ やたらかき」(d八一)は、想い人、恋人の名前を、これも火鉢に繰り返し書いている。

g 「読めぬ字を 何といふ字に 読んで置」(a一三三)は、書状や掛け軸、名所の石碑などを読むさい、読めない難字を適当に「何々」と読み飛ば

す。時間のロスを防ぎ、読めない照れかくしをしているといえる。

h 「屏風に詩 聞けば主人も 相しらず」(b三七〇)も、訪問先の主人に屏風の詩歌の読み方を尋ねると、主人もまたわからないという笑い話である。

三 文字リテラシーの社会的環境

江戸時代の文字環境は、個人・家庭を越えて、地域社会においてもまた展開していた。たとえば、町には看板の文字が溢れていた。

① 看板

a 「看板を 見るなど味噌を 買^{かひ}にやり」(a一六三)は、味噌で有名な日本橋(東京都中央区)の新和泉町に下女らを使い遣^{よこ}るさい、近くの堺町や葺屋町^{かぶせちやう}の芝居町の看板に見とれて遅れないよう注意している。

b 「通りぬけ 無用で通り 抜けが知れ」(a一四八)は、「通り抜け禁止」の看板がかえって「通り抜け」の道を教えている。

c 「雨やどり 額^{がく}の文字を 能^{よく}ゆぼへ」(a三九)は、雨宿りで飛び込んだが、雨が止まず、寺院の山門に掛かっている額の字ばかりを覚えてしま^うと詠んでいる。

d 「御宸筆^{しんひつ} さだかによめぬ 花曇り」(d二七七)は、桜の季節の花曇りで上野寛永寺の勅額の字が、はつきりと読めないことを詠っている。

e 「高札を 眼で見るそばで 耳で見る」(d二六七)は、高札の前で、リテラシーの低い民衆が読めないのを、横で読む人の声で理解する様子を

詠む。高札が教え学ぶ機会になっていたことが示されている。

f 「小便無用札は無ひ 京の町」(d三七三)は、京都では男女とも立小便をすることとされ、「小便無用」の立札はないと詠っている。

g 「精進の 看板を出す 魚取留」(d二二七)は、忌中、喪中のさい、魚類を食べない、魚釣りをしないというタブーがあり、これを門札として出していた。

h 「虫よけを 読みよく貼るは 無筆なり」(a一二九)は、長屋の共同トイレなどで、虫よけの札はふつう逆さに貼るが、リテラシーの低い者はそのまま読みやすく貼ると詠んでいる。

i 「忌中札 さかさに読めば その病」(d二〇四)は、「忌中」を逆さに読むと「中氣」となる。

j 「梶原が 屏には毒を 書き散らし」(d二五五)は、歌舞伎の悪役梶原のような悪者が、塀に悪口などの落首・落書きを書き散らすことを詠っている。

② 男女関係

a 「友たちが きしやうをくわんへ 入れて遣り」(d二〇〇)は、心中者が愛を誓った起請文を、納棺のさい友人がそっと入れてあげる場面を描いている。

b 「切れ文に みれんらしくも 返す書き」(d二二二)は、男女の縁切り状を受け取ったにもかかわらず、未練がましく返事を書いていることを詠んでいる。

c 「切れ文を 母がついて、書かせたり」(d二二二)も、息子の縁切り状を母が横に付いて書かせている様子が詠われている。

d 「こし張りも たがひの文の あら世帯」(d二七五)は、新婚長屋の壁や襖の下半分に貼るこし張りに、それまで二人が交わした恋文を利用するというリサイクルの実態がうかがえる。

③遊び場

a 「うえ字ばん とみ場と角力 場で用ヒ」(d八四)は、植字版(活字版)を使って作る宣伝ビラや番付は、富籤場と相撲の場所のものとある。

b 「品川の 客人偏の あるとなし」(a一四二)は、遊女で有名な品川宿に遊びに来る客は、薩摩藩屋敷の「侍」と近所の寺院などの僧であり、「寺」に人偏の有無の違いを詠っている。

c 「口篇に 空おそろしき 起請文」(d二〇〇)は、女郎の起請文が啞(嘘)であることを示している。

d 「暮の文 候べく候に 書かぬ也」(d二四八)は、年の暮に吉原遊女が馴染みの客に無心する手紙は、丁寧には書かず。切羽詰まっている様子を詠っている。

e 「さてとやの 所から下卑る 暮の文」(d二四八)は、「さて」から入る本題は下卑て借金の取り立てや申し入れとなる。

f 「女郎屋の 掟をひよぐり ながら読み」(d三七六)は、女郎屋の注意事項を、トイレで小用を足しながら読むと詠っている。トイレに張り紙があったことがわかる。

g 「客帳は けだし女郎の 秘書にして」(b二四六)は、女郎の顧客リストは、秘密のノートであると詠んでいる。

h 「仕舞札 客の来るのを 松の内」(d三四九)は、遊郭で貸切るさい芸者名を店外に張り出すのが仕舞札であり、あとは客が来るのを待つばかりである。

i 「仕舞札 しまいふだ はては手前の 内へはり」(d三四九)は、逆に客がつかず、貸切り札は内に向けて貼っている。

j 「おはなしと いふにとらまへ 何が出た」(d一三四)は、お咄は富くじの当番号の刷物と配る人で、その人が口上を述べる前に情報を聞きたそうとしている。

④文字遊び

a 「明の字が われて世界を 寐せおこし」(b二八四)は、「明るい」という字の偏の「日」は太陽で社会を起こし、つくりの「月」は社会を寝せるといふ文字遊びである。

b 「万の字も 書くにも一が はじめなり」(b三四七)も、「万」の字の「一」から始まることを述べている。

c 「しんにうを 掛て米屋の 子を尋ね」(b三七六)は、米屋の米の字に前掛けではなく、しんにゅうをかけて迷子探しをするという文字遊びである。

d 「魚へんに 交てはよせる かまぼこや」(b三九三)は、筋蒲鉾が鮫の皮や軟骨に、すり身やつなぎのでんぷんなどを混ぜ蒸し上げて作るとい

う由来にもとづく字遊びである。

e 「日本の 誉れ智有虫 義有虫」(d一九四)は、日本の誉れは「蜘蛛」(虫偏に知)と「蟻」(虫偏に義)という文字遊びである。

f 「御加増の 加の字を馬の 上へ乗せ」(b三三七)は、武士が加増され駕に乗ることを許されたようすを示している。

g 「須田丁で 秋は木へんの 市が立ち」(d三九九)は、文化年間(一八〇四〜一八)、神田須田町(東京都千代田区)で「木」偏に「市」の柿を売る水菓子(果物)組合が成立したことを詠んでいる。

⑤ 広告・びら

a 「引札は 指をなめく 斜に来る」(a九八)は、広告配りが向かい合いの長屋に斜めに進みながらポスティングする様子を描いている。長屋には日々広告やビラが配布されていたのである。

b 「引札も されず棺屋の 見世開き」(d一九三)は、葬儀屋の開店のさいは、広告は配られなかったことを詠んでいる。

c 「赤穂記の びら塩町の 床へはり」(d三二七)は、「赤穂記」出版の宣伝びらを、四谷塩町(東京都新宿区)の髪結床に貼って本のPRをする。赤穂の塩と町名をかけているが、髪結床は宣伝の場でもあった。

d 「ちぢごやの あいそうになる 雨がふり」(d四)は、日本橋の呉服店三井越後屋が、突然の雨のさいに店のネーム入りの傘を貸して宣伝に利用していたことを詠んでいる。

e 「裾野から 大文字のとぶ 俄雨」(d四四四)は、富士山の見える駿

河町を裾野に見立て、越後屋が俄雨のさいに貸した傘に「越後屋」の大文字の書いてある傘を借りて飛ぶように出ていくようす。

f 「手代にも 正札付の 呉服店」(d三七二)は、呉服店の商品の正札値段と同様に、手代たちも社員教育や担当制などにより人物保証をしている。

g 「来る年の 物知り顔や こよみ売」(d一九五)は、戸別に暦を配布する暦売りが、来年の良い日悪い日などを事前によく知っていて説明することを皮肉っている。

⑥ 寺社・石碑など

a 「聖堂で しかられている 千社札」(d四二〇)は、湯島聖堂(東京都文京区)を神社と間違えて、千社詣の人が自分の名前、生国・住所などを印刷して社殿などに貼り、叱られている様子を詠む。

b 「千社目の 札にしまった 糊をつけ」(d四二〇)は、町人たちはオリジナルの千社札を作り、願い事とともに神社に貼って回った。その最後は糊も不用になるのでたくさん塗ったとある。

c 「此花を 折るなだろうと 石碑見る」(d四一四)は、飛鳥山(東京都北区)の石碑が漢文体で書かれており、難解で有名であった。

d 「なんだせきひかと 一つもよめぬなり」(d四一四)は、名所などで石碑を見つけても、全く読めないことを笑っている。

⑦ 手習い・寺子屋

a 「げんさんだいじ とよんでいる いろはの子」(d一八九)は、手習い

初心者の子が、天台宗恵大師の元三大師を「げんざんだいし」と誤読したことを詠う。

b 「師匠様 かしく(可祝)と以上 別に置き」(d一五三)と、手習い師匠が手紙文の最後に書く男子の「以上」、女子の「かしく」を使い分けて手本を作成し、男女別にテキストを配る様子を描く。

c 「師匠様 一日釘を 直してる」(d三三五)は、手習い生徒の下手な金釘文字を直している様子を詠む。

d 「師匠様 いろはのうちは こわくなし」(d三三五)と、入門時・初心者頃は教えるのが楽なことを詠んでいる。

e 「師匠様 こわがるやつは 手が上り」(d三三六)と、師匠の指導を恐れてすっかり習う真面目な生徒は、上達が早いという。

f 「師匠様 つくえはおもき とがめ也」(d三三六)は、いたずらした生徒に対し、机を持たせたり、机の上に立たせたりするのは、罰が重い場合と詠んでいる。

⑧出版・情報流通

a 「読売の 草履履いたを つみぞみず」(d八一三)は、読売(瓦版)を売る人は、少しでも背を高くして声が通るように、皆下駄履きであった。

b 「須原屋の 桜木へのる 人は武士」(d四〇二)は、日本橋通一丁目(東京都中央区)の須原屋茂兵衛が売り出した大名・旗本などの『役職名鑑』(武鑑)は、全国的に売れて利用された。桜木は版木に使われる。室町時代の臨濟僧一休宗純の「花は桜木、人は武士」にかけたもの。

c 「御役がへ 茂兵衛ちく一 かしこまり」(d四〇二)も、武士の役務人事を、町人の須原屋茂兵衛が、畏まって受ける面白さが読まれている。

d 「おなじくを 四五人で持つ へぼ角力」(d四〇四)は、摺り上げられた相撲番付を格下力士四、五人で運ぶ様子を詠う。相撲番付も町に広まっていた。

e 「北斎だねと 摺物を 撥で寄せ」(d四〇六)は、三味線を弾く遊女が葛飾北斎の摺物絵(浮世絵)を近くに寄せる様子を詠っている。

f 「節用を ひかへて庄屋 したゝめり」(d四一六)は、文明年間(一四六九〜八七)以前に成立し普及した『節用』(通俗辞書)を参考書として準備し、庄屋が文書を作成することを詠んでいる。

⑨歌舞伎

a 「ありやくの 書拔をよむ はやし町」(d一四四)の「書拔」は、歌舞伎・芝居狂言の自分のセリフの書き抜き台本である。このため、囃子方が読むのは、「ありやく」という言葉ばかりである。

b 「吉の字の 上唇が 黒くなり」(d二〇三)は、「役者評判記」(ランキング)の「吉」の字の「口」の上の部分に黒く塗る評価符号で、ラングアップしたことを示す。

c 「黒吉に なつたとさわぐ 長局」(d二四八)も、大奥女中が最上役者が「役者評判記」でランク上昇したことを大喜びする様子を描く。

d 「腰張りを はかまはおりで くばる也」(d二七五)は、役者らが初日前夜に正装で芝居番付(腰張り)を配布する様子を詠っている。

e 「当り狂言 絵見世迄」 群集する」(d 一一〇) は、ヒットした狂言の役者絵は、絵本屋まで群集が買いに来るといふ。

f 「口へんに そら音で関を とをりぬけ」(b 三九三) は、歌舞伎「義経千本桜」の安宅の関を詠ったもので、弁慶が義経を「啞^{うそ} 叱り」、関所役人の富樫に対して「嘘」で切り抜けたことを詠っている。

おわりに

以上、本稿では、長期にわたる「徳川の平和」^{バクストクガワーナ}が、列島社会の「文明化」に基礎づけられたものであり、同時にそれは高いリテラシーにもとづく「笑い」を伴うものであったことを、川柳や落書を例に指摘した。江戸時代、家には日記・書状・草紙・証文など、地域社会にも高札、看板、広告、ビラなど多様な文字環境が整えられていた。そして文字をツールとする人々の「笑い」の共有もまた、「文明社会」の実現・発展に大きく寄与したのである。

註

(1) 『匏庵遺稿一』(続日本史籍叢書、東京大学出版会、一九七五) 一六七頁。

(2) 渡辺華山「缺舌惑問」(げきぜつわくもん) (『日本思想大系五五・渡邊華山・高野長英・佐久間象山・横井小楠・橋本左内』(岩波書店、一九九六) 八八頁。

(3) 大石学『江戸の教育力―近代日本の知的基盤―』(東京学芸大学出版会、二〇〇七)、大石学『新しい江戸時代が見えてくる―『平和』と『文明化』の二六五年―』(吉川弘文館、二〇一四)。

(4) 大石学「近世庶民のリテラシー―小咄から見る江戸の文字環境―」(五十嵐敬喜他編著『多様な学びのかたち・近世日本の教育遺産群を世界遺産に』ブックエンド、二〇二一)。

(5) 『改訂信長公記』(桑田忠親校注、新人物往来社、一九六五) 三五六頁。

(6) 江戸叢書刊行会編『江戸叢書』(第二巻、鳳文書館、一九一六)。

(7) 瀧本誠一編『続日本経済叢書』巻二 三四〇頁。